成果と課題

○たくさんの外国の方に、しかも気持ちよく来ていただけた。さらに回数を追うに従い、子どもの関心も増して生き生きと話が聞けた。聞くたびに付箋を利用した視点の明確化がよかった。

○６年生は準備に２６時間をかけた。その間に様々な国の「あたり前のちがい」に気づくことができた。この準備がなければ、子どもたちが提案する内容も大きく変わったと考えている。異文化理解を題材にした今回は、その本質に迫るためにも「準備」の時間に時間をかけることが大切であることがわかった。

○願いをしっかりともてていないと、テーマが決められないことがわかった。このテーマは学習の核となるものなのでじっくりしっかり考えることが大切だと痛感した。
プロジェクト学習を先へ進めていく中で実感実感。

○子どもたちが「仲よくする」という意味をしっかり考えていないことがわかった。
「自分の願い」を書き出す場面では、自分の身のまわりで考えられる仲よくする方法に終始してしまった。相手を受け入れることや相手の文化を尊重することの大切さに気づかせたいという指導者の意図から大きくずれたために、「仲よくするとはどういうことか。」ともう一度考え直す場面をもった。その後、子どもたちは大きく変わった。

○チームの数は１０チームだった。２人の教師で把握するのでこれ以上は難しいと感じた。

○チームの提案は、「～のために～の方法を提案します」という穴埋め式を使って考えるようにしたので、アイデァを生み出すことが大切であることを伝えられた。

○チームの提案は、相手意識をより具体的にもって意欲が出た。

○ゴールを達成するためにはどんなことが必要なのかを見通すことはなかなか難しいことだが、大切なことだと思った。ゴールを目指してどういう手順でそこまで行き着くかを考えることは将来とても必要になる力だと思った。

○この段階で「情報リサーチ」にあるシート１１の調べるときの注意すべき点を考えることができた。調べ方をイメージすることができたのでよかった。

○情報を捨てるように言われたときは、えーっという感じでショックだった。か　なりシビアだが、本当に自分たちにとって必要なものかを考えることは力になった。

○チームのテーマ、それに対する具体的な提案をそれぞれ４つ切り画用紙に書き出した後、証拠をどのように表現するのかを考えるようにした。ここは簡単に進ませないで一つ一つ教師に考えを話しに来るようにしてよかった。

○模造紙に起承転結を表現する力がまだないので、よい勉強になった。

○自分が社会に役立つと言うことを発見できたという感想をもつ子がいたこと自己肯定感をもてたと言えるだろう！！

○これまでの苦労のかいもあって、いいものが提案できた。ひとりひとり自分たちが考えたことを聞いてもらいたい！わかってもらいたい！という気持ちで行い、付箋でアドバイスや感想を書いてもらったり、直に反応をみることができ、自信につながった。
他の場面でも明らかに発言の様子が変容した児童もいた。

○＜伝えたいこと＞＜相手にさせたい気持ち＞＜そのためにすること＞と考える道筋がネはっきりしていたため、チームで話し合いながら、自分たちの力で進めることができた。

○全体発表形式だけでなく出店形式でも行ったので、聞く人が気軽に質問したり、聞く人の表情を見ながら話したりすることができた。

○国際交流員の２人から、異文化理解の考え方としてすばらしい！という評価を得て子どもたちも教師も大きな自信になった。

○ホームページの「教えてコーナー」が役立った。世界各地の日本人学校に派遣されている先生方からお返事をいただくことができ、それを他のチームの友だちとも共有することができた。

○「世界各地のお助けマン」をいかに見つけるかが鍵になった。子どもたちの質問に一番早く対応してくれたのは、世界各地に派遣されている教員だった。岐阜県から派遣されている日本人学校教員のネットワークを活かす可能性が見いだせた。

○メールを子どもたちが直接出すのではなく、紙に書かせて教師がまとめて送った。質問を寄せられる相手のことを考えれば、こうした方法を今後も続けた方がよいと考える。

○学校にある国際理解に関する資料を廊下に集めたことは、子どもたちが資料を身近にしてすぐに調べることができる点と教師が子どもたちの動きを把握する点で効果的だった。

●ゲストティーチャー探しが難しい。

●身のまわりの人たちが「世界とのつながり」をどのように考えているのかをもっと調べる時間をもってもよかった。今回は、１００人アンケートにより、身近な人たちの異文化理解を調べたが、相手意識をより明確にするためにも、お店の人、銀行の人、駅員さん、警察の人など様々な方々からも、「世界とのつながり」を調べる時間を増やせば、

提案する相手を子どもたちはいっそう明確にもって取り組むことができただろう。

●ブレーンストーミングが難しかった。

●テーマとゴールは教科を加味して考えるとよい。

●題材に関する「よい点」「問題点」がはっきりとしなかった。これは題材と相手意識が漠然としていたためと考えられる。

●「～のために～の方法を提案します」という穴埋め式の場合、「方法」という言葉だけでなく、他の表現も含めて、考えやすくするような配慮が必要だった。

●ブレーンストーミングは難しかった。

●工程表を作っていく過程で各チームごとに担任が指導した。ここに時間をかけて大切に取り組めば、情報リサーチは子どもの力で進められる。
●やっていきながら、調査する中でどんどん次に行うことが出てくるのでこの段階は細かく引っ張らない方がよかった。
●インターネットだけでなく、実際に話を聞くことが大きな勉強になった。
１学期に引き続いて、国際交流員に来てもらうことを考えればよかった。

●記事分担をしたが、どうしても形にすると言うことで負担の偏りが出る子がいた。
●情報を「捨てる」という表現は、小学生の子どもたちにはよくないと考える。
情報を様々な考えから「分類」し、その代表選手を出すという考えも子どもたちに「考える場面」を設けることになり、問題ないと考える。捨てるか残すかというのではそれまでの調べた満足感も充実感も無にしてしまう可能性がある。あくまでも「代表」という位置づけにすることで、どの情報も価値あるものという思いを子どもたちにはもたせておかなければ行けないと考える。

●多くの子がおたがいの良さを認めながら、聞くことができたが、一部の子が客観的に評価できない姿を見せた。

フェーズごとの
成果と課題

岐阜市立華陽小学校

フェーズ	○成果と課題●
準　備	○準備に時間をたっぷりかけ、いろいろな人の角度から見る目を養うことでテーマゴールの必然性がはっきりとした。 ○親子交流会を開くことで自分たちの考えや意識を広げることができた。 ○地域の人とふれ合うことで身近なところを見つめるようになり、お年寄りに対する見方が変容したり、気づきが多かった。 ○安田先生の顔は大きい（広い？）おかげで、たくさんの外国の方に、しかも気持ちよく来ていただけた。さらに回数を追うに従い、子どもの関心も増して生き生きと話が聞けた。聞くたびに付箋を利用した視点の明確化がよかった。 ○６年生は準備に２６時間をかけた。その間に様々な国の「あたり前のちがい」に気づくことができた。この準備がなければ、子どもたちが提案する内容も大きく変わったと考えている。異文化理解を題材にした今回は、その本質に迫るためにも「準備」の時間に時間をかけることが大切であることがわかった。 ●題材選びを失敗した。（４年）身近じゃなかった。気軽に調べに行けなかった。３年生は成功！ ●プロジェクト学習に適応する題材と範囲を教師がスタート地点で明確に持つことが大切である。 ●ゲストティーチャー探しが難しい。 ●身のまわりの人たちが、「世界とのつながり」をどのように考えているのかをもっと調べる時間をもってもよかった。今回は「１００人アンケート」により、身近な人たちの異文化理解を調べたが、相手意識をより明確にするためにも、お店の人、銀行の人、駅員さん、警察の人など様々な方々からも、「世界とのつながり」を調べる時間を増やせば、提案する相手を子どもたちはいっそう明確にもって取り組むことができただろう。

フェーズ	○成果と課題●
テーマ ゴール	○準備の段階で今の公園のよい点や問題点がはっきりとしていたので、子どもたちの中から自然にテーマとゴールが生まれた。 ○「～のために」というミッションをもつことは、方向性がはっきりと見いだせて意欲付けになった。 ○願いをしっかりともてていないと、テーマが決められないことがわかった。このテーマは学習の核となるものなのでじっくりしっかり考えることが大切だと痛感した。プロジェクト学習を先へ進めていく中で実感実感。 ○子どもたちが「仲よくする」という意味をしっかり考えていないことがわかった。「自分の願い」を書き出す場面で、自分の身のまわりで考えられる仲よくする方法に終始してしまった。相手を受け入れることや相手の文化を尊重することの大切さに気づかせたいという指導者の意図から大きくずれたために、「仲よくするとは、どういうことか。」ともう一度考え直す場面をもった。その後、子どもたちは大きく変わった。 ○チームの数は１０チームだった。２人の教師で把握するのでこれ以上は難しいと感じた。 ○チームの提案は、「～のために～の方法を提案します」という穴埋め式を使って考えるようにしたので、アイデァを生み出すことが大切であることを伝えられた。 ●提言のイメージが湧かず、難しかった。 ●チームに人数が願い別にすると、２人というのもできてしまうが２人のとりくみでもよいのだろうか。 ●ブレーンストーミングが難しかった。 ●テーマとゴールは教科を加味して考えるとよい。 ●題材に関する「よい点」「問題点」がはっきりとしなかった。これは題材と、相手意識が漠然としていたためと考えられる。 ●「～のために～の方法を提案します」という穴埋め式の場合、「方法」という言葉だけでなく、他の表現も含めて、考えやすくするような配慮が必要だった。
計　画	○チームの提案は、相手意識をより具体的にもって意欲が出た。 ○ゴールを達成するためにはどんなことが必要なのかを見通すことはなかなか難しいことだが、大切なことだと思った。ゴールを目指してどういう手順でそこまで行き着くかを考えることは将来とても必要になる力だと思った。 ○この段階で「情報リサーチ」にあるシート１１の調べるときの注意すべき点を考えることができた。調べ方をイメージすることができたのでよかった。 ●ブレーンストーミングは難しかった。 ●工程表を作っていく過程で各チームごとに担任が指導した。ここに時間をかけて大切に取り組めば、情報リサーチは子どもの力で進められる。 ●やっていきながら、調査する中でどんどん次に行うことが出てくるのでこの段階は細かく引っ張らない方がよかった。

フェーズ	○成果と課題●
情　報 リサーチ	○インタビューをして地域の人や外部の人にアポイントをとって、電話などをしたりなどして結論を得るための裏付け調査ができ、自身をつけた。 ○３年生では、正しい情報を得るためにどこに聞けばよいのか、どういう方法でインターネットの公式ページを開くのかを教えたので、正しい情報を得ることができた。 ○国語の「インタビューをしよう」「アンケートを採ってまとめよう」の学習と関連づけて情報リサーチを進められてよかった。 ○直接、社会の人と話をする中で福祉に対する（小さい子あるいはお年寄りに対する自分たちのものの見方を含め）意識の甘さを認識することができた。 ○情報源の確保が大変！今年は大勢の方の協力がありできた。確かなという部分へのこだわりが教師側に弱かったが、プレゼンに向けての活動をし始めた途端にその大切さに教師の側がやっと気づけた。 ○ホームページの「教えてコーナー」が役立った。世界各地の日本人学校に派遣されている先生方からお返事をいただくことができ、それを他のチームの友だちとも共有することができた。 ○「世界各地のお助けマン」をいかに見つけるかが鍵になった。子どもたちの質問に一番早く対応してくれたのは、世界各地に派遣されている教員だった。岐阜県から派遣されている日本人学校教員のネットワークを活かす可能性が見いだせた。 ○メールを子どもたちが直接出すのではなく、紙に書かせて教師がまとめて送った。質問を寄せられる相手のことを考えれば、こうした方法を今後も続けた方がよいと考える。 ○学校にある国際理解に関する資料を廊下に集めたことは、子どもたちが資料を身近にして、すぐに調べることができる点と教師が子どもたちの動きを把握する点で効果的だった。 ○一つの情報を２つ以上の情報源から確かめようとする姿勢は、子どもたちの中に根付きつつあるように感じられた。確かな情報をもとに考える学びの姿があった。 ●川などの実態調査に何度も出たいときも安全確保のためにサポートが多くいるのでここでも題材選びがポイントになった。 ●中学年は、チーム別活動を子どもだけで進めるのは難しい。毎時助言が必要で担任だけでは、対応しきれなかった。 ●対象が人であるだけでアンケートにしてもインタビューにしても同時期に集中してしまうし、地域の実態調査で数をとろうとすると、この期間では難しかった。チームによる期間の幅が必要である。 ●生き生きとやっていたが、調べること自体が楽しくなってしまい、目的（テーマ）を忘れてしまっていた。 ●教師がどのような調べ方ができるのかが、子どもたちの活動を左右する。教員がどれだけ子どもたちの調べようとすることに先回りして、相手を見つけることができるかが鍵になる。そう言う意味では、テーマ・ゴールを１学期にすませておき、ここからを２学期に始めれば、夏休み中に調べることができる。 ●工程表に毎時間自己反省を書かせた、調べているうちに当初の計画どおりには進まなくなるので、毎回アクションシートを書くようにすればよかった。 ●インターネットだけでなく、実際に話を聞くことが大きな勉強になった。 １学期に引き続いて、国際交流員に来てもらうことを考えればよかった。

フェーズ	○成果と課題●
制　作	○３年生はどこに何を書くのかの基本型を決めて取り組んだので、初めてのことだが、見通しをもって進められた。 ○国語の学習が多少生かせ、発表物、スピーチするときの材料という意識でまずはストーリーを話し合い、それに応じて必要かどうかを判断し、情報をまとめる姿が見られた。 ○情報を捨てるように言われたときは、えーっという感じでショックだった。かなりシビアだが、本当に自分たちにとって必要なものかを考えることは力になった。 ○チームのテーマ、それに対する具体的な提案をそれぞれ４つ切り画用紙に書き出した後、証拠をどのように表現するのかを考えるようにした。ここは簡単に進ませないで一つ一つ教師に考えを話しに来るようにしてよかった。 ○模造紙に起承転結を表現する力がまだないので、よい勉強になった。 ●記事分担をしたが、どうしても形にすると言うことで負担の偏りが出る子がいた。 ●情報を「捨てる」という表現は、小学生の子どもたちにはよくないと考える。情報を様々な考えから「分類」し、その代表選手を出すという考えも子どもたちに「考える場面」を設けることになり、問題ないと考える。捨てるか残すかというのではそれまでの調べた満足感も充実感も無にしてしまう可能性がある。あくまでも「代表」という位置づけにすることで、どの情報も価値あるものという思いを子どもたちにはもたせておかなければ行けないと考える。
プレゼンテーション	○多くの人の前で自分たちの考えを大きな声で精一杯発表でき、自信がついた。 ○３，４年の学年間で交流したことや、６年生のプレゼンを見せてもらったことでプレゼンテーションのイメージをもつことができた。 ○地域の人、中央青少年会館の先生にも来て頂き、評価を受けて、子どもたちも教師も自信がついた。 ○自分が社会に役立つと言うことを発見できたという感想をもつ子がいたことは自己肯定感をもてたと言えるだろう！！ ○地域の方にも心を動かして頂いた内容がいくつもあり、プレゼン後にさっそく、実際にやらないかという声をかけてもらえる姿があった。 ○チェック項目を自分たちで考えることで相手に伝えようとする意識もより高まり、発表方法も工夫することができた。 ○これまでの苦労のかいもあって、いいものが提案できた。ひとりひとり自分たちが考えたことを聞いてもらいたい！わかってもらいたい！という気持ちで行い、付箋でアドバイスや感想を書いてもらったり、直に反応をみることができ、自信につながった。他の場面でも明らかに発言の様子が変容した児童もいた。 ○＜伝えたいこと＞＜相手にさせたい気持ち＞＜そのためにすること＞と考える道筋がはっきりしていたため、チームで話し合いながら、自分たちの力で進めることができた。 ○全体発表形式だけでなく、出店形式でも行ったので、聞く人が気軽に質問したり、聞く人の表情を見ながら話したりすることができた。 ○国際交流員の２人から、異文化理解の考え方としてすばらしい！という評価を得て子どもたちも教師も大きな自信になった。 ●多くの子がおたがいの良さを認めながら、聞くことができたが、一部の子が客観的に評価できない姿を見せた。

フェーズ	○成果と課題●
再構築	○今までチームのメンバーに頼りがちだった子も、しっかりと自分なりに関わってきた子も、自分の考えをもって書けていた。 ○自分なりのこだわりをもって提案できた子も多く、プロジェクト全体のテーマを本当に自分のものとして考えられるようになったんだ！とうれしく思った。 ●チームでの活動の際に、しっかりと自分自身で考えていなかった子は、なかなか取り組めず、進めることもできなかった。確かな情報へのこだわりも弱かった。
成　長 エントリー	

その他（全体を通して）

・国際交流員や日本人学校の先生方など協力して頂ける人材の確保が大変かな？安田先生のような方が見えなければそれだけで教師が引いてしまいそう。
・教科の学習だけでなく、学校生活全てが基盤になっている活動であると実感した。
・教科のテストの点がよい子が、必ずしも主体的に取り組めるとは限らなかった。テストにはつながらないが、自分なりのこだわりをもって地道に調べる力をもつ子を見いだせた。